

笑ってごらん

第 601 号 H. 29. 10. 24 発行

～今日のことば～

世界の大偉業の大半は、もはやこれで絶望かと思われた時に、それでも仕事をやり続けた人々の手によって成し遂げられた。(実業家：デール・カーネギー)

◇◆「秋の朝 霧雨に煙る 松山城」・・・20日(金)の朝、雨の中、高台にある松山城へ向け比較的急勾配の参道を登り、ラジオ体操や太極拳に勤しむ方々を横目に松山城を仰ぎ見た時に頭に浮かんだ一句。「何の感慨も含まれない目に映ったままの駄作だな・・・」俳句の難しさを感じた。 ◆18日(水)から21日(土)まで全国私学教育研究集会視察のため愛媛県松山市へ赴いた。来年、この会を鹿児島で開催することが決まっております、私はその運営委員の一員に任命されたことから、他校の理事長先生・校長先生方15名とともに視察に行ったのである。 ◆チェックインしたホテル正面に小高い山があり、頂上に松山城がそびえていた。「よし、城まで登ろう！」・・・この4日間の大半はホテルに缶詰めになることが予測されたので、早朝ウォーキングをするため運動靴・ジャージは準備してきていたのだ。まず、2日目の朝は松山城の二の丸・三の丸がある辺り(城山公園)を小一時間散策。おおよその周辺地理を把握。そして、3日目の朝、松山城登山を決行した。途中までロープウェイもあるのだが、朝6時から動いているはずもない。また、スキーの一人用リフトみたいなロープウェイであり、雨も降っていたので、動いていたとしてもちょっとキビシイ状況。ゼーゼーと荒い息をつきながら松山城に辿り着いた。晴れていれば眼下の城下町が綺麗に見えたのであろうが、霧でほとんど何も見えない・・・。冒頭の句はそんな時に詠んだもの。最終日の朝も雨。松山市駅の近くに「子規堂」(正岡子規が17歳まで暮らした家を再現した)という施設を見つけ足を運んだ。そこには子規の直筆原稿や遺品なども展示されていた。



「子規堂」の見学を終え、ホテル近くまで戻ってきた時、一句浮かんだ。「秋深し 子規も詠んだか 雨の城」・・・う～ん、まだまだだな・・・ ◆そもそもどうして俳句なんだ?と思った人も多いことだろう。それは、全体集会の講演が俳人の夏井いつきさん(芸能人の作った俳句を評価するTV番組があるよね)であり、「守りたいもの、または変えたいものをテーマに5分で一句作れ!」と言われて約600名の参加者が頭をひねった時間があつたゆえのことである。たった17文字で表現するのはかなり大変。でも、「俳句を作る作業では前頭葉が活性化する」と夏井先生も話されていた通り、頭が熱を帯びてくる感じがする。老化防止に効果的かも知れない・・・。 ◆2017年は正岡子規、夏目漱石の生誕150周年の節目の年という。そんな記念すべき年に縁あって松山市を訪れることができたのは幸いである。メインの会議視察に関しては課題山積で、来年鹿児島で開催するにはまだまだ整備しなければならないことが多くある。他の運営委員の先生方とともに会議を重ねなければなるまい。折しも超大型台風が北上中とあって、そのスピード如何によっては帰鹿が危うかったが、36人乗りのマイクロバスのような小さなプロペラ機は大揺れしながら無事飛んだのだ。 ～・・・～

感謝道

◇◆本館前の花壇に植えられているキンモクセイにオレンジ色の小さな花が咲き、馥郁とした香りを放っている。廊下の窓を開けると芳香がそこら一帯に漂う。深呼吸してお腹いっぱい香りを吸い込みたい気分になれる。聴けば先週はここまで開花していなかったという。仕事が忙しくても、何だかホッとした気持ちになれる、まさに癒やしの香りである。こうして年1回この時期に短い期間ながら芳香を楽しむことができることを喜びたい。